

古代仏教王国トムシユク（尉頭国）の研究

山田 勝久

一、尉頭国について

二〇〇五年八月と二〇〇五年十一月、私はカシユガル地区博物館と新疆文化庁の支援のもと、尉頭国の仏教遺跡を調査した。かつて巴楚^{ばそ}には、大谷探検隊が三回^{さんかい}入っているが、尉頭国は訪ねていないので、日本人としては初踏査であった。調査期間中『中国絲綢之路辞典』新疆人民出版社、一九九四年刊の副主編をされた李愷^{りがい}先生はじめ、トムシユクの文物保護管理所の研究員が三名同行し助言して下さった。

漢代初期の尉頭国の王都は、『漢書』西域伝に「尉頭国は尉頭城に治す」とあり、王宮は古代シルクロードのルートであったトムシユク山麓の尉頭城にあった。ガンダーラ語、クチャ語、サカ語が話され、王都は北魏王朝の初期まで続いている。とくに漢の宣帝の神爵^{しんしやく}二年（前六〇）には、トルファンより西、サマルカンド方面までのオアシスは、みな西域都護府の管轄下となった。尉頭国の支配者も、漢王朝の印綬を佩び、国中が「建武より以来、西域、漢の威徳を思い、咸内、属を楽しむ」（『漢書』西域伝）といったありさまであった。

当時、尉頭国には西域系漢官が、左右都尉各一人、左右騎君各一人、計四名常駐していた。住民の約八割が仏教を

信仰していたが、中にはマニ教や拝火教を信仰する住民もいたらしく、尉頭国の支配地からは、同年代の遺址に三教が並存していたことが証明されている。このことは、尉頭国に宗教の自由があったことを示しており、どの宗教を信ずるかは、住民一人ひとりの自主的判断にまかされていたのである。

尉頭国は、三世紀から十世紀まで、西域北道を往来する旅人が必ず通る中継地に位置していたので、朝貢諸国の官人のほか多くのソグド（粟特）人が、ラスピラズリなどの宝石、香料、ガラス、絨氈、薬品、毛織物、絹製品などの珍貨奇物を持って宿泊し、賑わいを見せていた。

『北史』西域伝には、五世紀以後、トルファンより西方のオアシスに、多くのソグド商人が住んでいたことを推測させる、「高昌より以西の諸国は、人皆、深目高鼻なり」との記述もある。唐の玄奘もトムシク西方二百余キロにある疏勒に入った時の見聞を『大唐西域記』に、「深目高鼻」と記している。なお、トムシク市歴史陳列館所蔵のソグド文書を読むと、ソグド商人は西域南道や北道、また河西回廊や中国本土に於て集落を営んで定住し、シルクロードの交易を独占していたことが分かる。その文化水準は高く、居住地から出土する、絢麗な花紋の絹製品や彩絵陶器、仏像や経典、精美な工芸品などは、その文化の光彩を今に伝えている。

ところで、漢代においては、敦煌の玉門関、または陽関を西に出ると、道は西域南道と西域北道に分かれ、『漢書』西域伝には、タリム盆地の北縁には「山国、焉耆、危須、尉頭、渠犂、烏壘、龜茲、温宿、姑墨、疏勒あり」とある。この西域北道、すなわち天山南路の尉頭国について、清の徐松の『漢書』西域伝補注や、『資治通鑑』漢記十二に詳しい。漢代のその勢力は、西域36カ国中、人口、兵士数とも二十二番目に位置している。長安からは八六五〇里の距離にあり、戸数は三〇〇、人口は二三〇〇、兵士の数は八〇〇、経済の中心は牧畜で、風俗は烏孫国の住民とよく似ているという。

尉頭国は、弱小国ゆえに大国に従属するしか存続を保つ道はなく、そのつど国家の運命を他国の支配者にゆだねて

いた。匈奴、漢、蠕蠕、西突厥、鉄勒、吐蕃、唐などに従属して命脈を保っていたのであるが、それでも、時として政治的判断を誤り、隣国の攻撃を受けることもあった。たとえば、後漢の章帝の建初元年（七六）、班超は皇帝の詔を受けて疏勒から都に帰るため、西域南道を経て于闐まで到った。しかし、于闐の住民が班超の馬の足にしがみついて駐留を懇願したので、再び疏勒に引き返すことにした。不在中、早くも疏勒の一部勢力が、対立する龜茲支配下の尉頭国と通じていた。それを知った班超はすぐさま尉頭国へ遠征し、六百余人を斬殺している。

後漢の滅亡後、中国本土は三国南北朝の動乱期に入るが、漢民族の西域への影響力が弱まるにつれ、タクラマカン砂漠の周辺のアシスは次第に統合され、大きく五カ国に分けられ独立していった。すなわち、龜茲・鄯善・焉耆・疏勒・于闐である。尉頭国は、兵士二一〇七六名、人口八一三一七を有する龜茲国の保護を受け、その属国となっていた。『魏略』西戎伝には、「姑墨国、温宿国、尉頭国は、皆龜茲に并属す」とある。

六世紀に入ると、尉頭国は、トクズサライ山の南麓、高さ五十五メートルの九台北山に遷都し、トクズサライ（托古孜薩来）城と名付けた。私がGPSで王城の位置を測定したところ、東経七十九度二分、北緯三十九度五十八分、海拔一一五三メートルであった。尉頭国はこの山城を中心に、現在の新疆ウイグル自治区烏什県と阿合奇県一帯を支配したのである。ただし『旧唐書』西突厥伝によれば、統葉護可汗（六一七～六三〇頃在位）は「控弦数十万、西域を覇有す」とあることから、この時期の尉頭国は、西突厥の支配下にあったと考えられる。しかし、内乱が起り、統葉護可汗が暗殺されると西突厥は分裂し、その混乱に乗じて唐は西域へ進出したのである。

ところでキルギス共和国のトクマク（古代・碎葉城）から渾河を渡った西南一八〇キロのところに、『新唐書』地理志に記述された済泅館という宿場駅がある。済泅館は達干城のことで、達条河の北約十キロにあり、今日はアチャと呼ばれる小さな村になっている。その東五キロのところには、高さ十六メートルに及ぶ古塔や、烽火台、それに城郭も残存しており、すべて尉頭国の古跡であり、支城であった。

唐王朝は貞観（六二七～六四九）中、焉耆、龜茲、于闐を降し西域支配を確立した。それにともない尉頭国、すなわち唐代の郁頭州を龜茲都督府に隸属させ、その地理的位置の重要性を考え、屯田兵を置き西域支配の重要な一拠点としたのである。『旧唐書』地理志は、その間のこととして「東は安東府に至り、西は安西府に至る。南は日南府に至り、北は單于府に至る」と記述している。龍朔元年（六六二）年以後、『旧唐書』地理志、西域十六都督州府の条に、「西域府・州八十・県一百一十・軍府一百二十六を分置す。皆、安西都護府に隸せしむ」とあるように、唐威が西域全土に徹底するように行政を布陣したのである。

六七〇年四月、吐蕃がチベットのラサから長駆し、西域の十八州を陥落させたが、その時、郁頭州も吐蕃の支配下になった。しかし、六七九年、唐朝が安西四鎮を回復すると、再び、郁頭州も唐の勢力範囲となったが、六八六年、また吐蕃軍の入城を許すことになる。しかし、六九二年十月、武威総管の王孝傑の率いる唐軍が吐蕃を大いに破り、郁頭州は完全に唐の領域になった。

ところで、七世紀に入ると、西トルキスタンの康居国（現・サマルカンド）では、王族の中でイスラム教を信ずるグループと、仏教を信仰するグループとの争いが続き、七五年のタラスの戦い以前の、六七六年にはやくもイスラム化している。仏教王国の疏勒（現・カシュガル）も十世紀中頃、カラハン王朝四大汗のソトク・ブカラハンが仏教を捨ててイスラムを信仰してからは、近辺の仏教政権との聖戦を展開している。西域南道の于闐^{（三）}は九七〇年代から一〇〇九まで、カラハン王朝との孤独な宗教戦争を展開していたが、敦煌からの援軍もなくとうとう滅亡してしまった。

西域一大仏教拠点だった郁頭州は、一〇〇二年にカラハン王朝の大軍の攻撃を受け、唐王城^{（四）}も廢墟となってしまった。ただし、于闐と同じくイスラムと勇敢に戦った数少ない仏教地域として、その痕跡を今なお黒い「阿沙土」として残している。私は二〇〇五年八月の第一次調査の折、唐王城を十五メートルほど登ったところで黒ずんだ木片や、焼けただれた日干しレンガが散乱しているのを見つけた。明らかに火災によるもので、唐王城が落城する時の焼き討

ちによる残骸であつたと思われる。

地元の伝説によれば、宗教戦争の時、堅塁を誇った唐王城は頑強に抵抗し、イスラム軍は多くの死者を出したという。怒ったイスラム軍は、阿里^{（五）}という優れた指導者を派遣し、やつと山上の堅城であつた唐王城を落城させることができたという。以来、歴史上から郁頭州も唐王城も消え、流沙に埋もれて長い間注目されることは無かつたのである。

仏教東漸の歴史を見た時、紀元前一世紀頃、疏勒から尉頭国に仏教が伝来したと推断できる。三世紀末には疏勒・于闐・龜茲・高昌が西域四大仏教拠点になると、尉頭国は疏勒と龜茲の二大仏教圏の中間に位置することもあり、またその風光明媚さから仏教の名城の一つとして繁栄した。僧侶も多数集まり、今なお三世紀頃の浮彫菩薩像を、唐王城の崖壁に二体見ることができる。

唐王城の城外には、カシュガルから東北に流れてきた疏勒川がある。大河の流れは尉頭国の住民や兵卒の生命を、千年余にわたって守り支えてきた。この地からは、五銖銭、ガラス玉、龜茲文字。ウイグル文字、漢文文書、開元通宝などが大量に出土し、今日、これらの多くはトムシユクの歴史陳列館に保存されている。

思えば私は、一九七六年より四十四回にわたって西域を踏査、葉城（カルガリク）郊外にあるキバン千仏洞やシィテア故城、さらに樓蘭故城とその墓室の壁画などを調査してきた。また、カシュガルの東北二十二キロにあるハノイ（康輿依）故城を調査した。ここは、漢代から唐代まで栄えた疏勒国の十二の支城の一つで、今なお漢代の望楼や、高さ約六、五メートル、幅約四メートルの城壁が、約二十数メートルにわたって横たわっており、まわりには陶片が土中より頭を出していた。私は六朝から唐代にかけて使用されていた、双耳罐や水壺や陶器耳などを発見できた。二〇〇五年、カシュガルとトムシユクの両方の古代遺跡を調査した結果、尉頭国の出土文物は、ハノイ故城の文物とほとんど同系列のものであることが分かった。また、ハノイ故城から出土したブラーフミ文書の字体も、尉頭国出土の文書と類似しており、尉頭国は、疏勒と龜茲の両方の文化的影響を強く受けていたことも判明した。

ところで、中央アジアにおける仏教滅亡、イスラム興隆の流れとなった要因は、仏教哲学がイスラム哲学より低いからではなかった。もともと仏教は生命の尊厳を基調として不殺生戒を貫くが、仏教守護のための戦いまで放棄したわけではなく、法を守るための刀杖等は許されていた。大乘仏教国の于闐が、約四〇年という長期間に及んでイスラム軍と戦った精神的理由もここにある。

シルクロードの仏教が衰退し西域がイスラムになったのは、いくつかの原因が考えられる。私は、最大の要因は内部からの崩壊、すなわち僧侶が増加しすぎて、異常な人口構成となってしまったことによると推断している。史書によれば、人口二、三万のオアシスに数千人の僧侶がいたことが判明している。また、出家者の布施、供養の強要、さらに僧侶集団の腐敗と墮落があり、民衆の支持を失った僧侶は、イスラム軍が侵入する前に仏教信者を捨て、金品を持って東方へ逃亡してしまったのである。

今一つの理由は、広大なタクラマカン砂漠の周辺には、二十前後のオアシスが点在していたが、亀茲を除けばいずれも二万人から三万人であった。中には千人程の王国もあったが、それぞれが独立国家の体制を有していたので、自主性が強く、団結して事に処する気運に欠けていた。そこに十万人から二十万のイスラム軍の猛攻を受けたのであるから、いとも簡単に一つひとつ潰されていった。もしも、在家に優れた指導者がいて、オアシス諸国を束ね、大同団結して防衛線を構築していたならば、さすがのイスラム軍も容易には西域に侵入できなかったと思う。力ある民衆指導者の不在が、仏教滅亡を助長したといえる。

二、トクズサライ仏教寺院遺跡

唐王城の西方に、広大な仏教遺跡がある。後漢から北宋初期まで使用されていたトクズサライ仏教寺院で、東経七十九度一分、北緯三十九度五十八分、海拔は一〇九八メートルに位置している。寺院は南北約二五〇メートル、東西

一五〇メートル、高さ約十二メートルの台地の上に建立されていた。二世紀から九世紀中頃まで仏塔が林立し、宿房は参詣する仏教徒であふれ、仏殿からは読経が止むことがなかったという。

このトクズサライ寺院には九座の大殿があった。中でも山門殿には、左右に大きな金剛力士像があり、頭には宝冠を戴き、目は怒り牙をむき、手は金剛の杖を持って寺院を守護していた。その他、天王殿、大雄宝殿、観音殿、地藏殿、伽藍殿、祖師殿、羅漢殿堂、法堂殿があり、経堂、禅堂、浴室、宿坊もあった。

フランスのペリオは、一九〇六年の十月から十二月にかけてトクズサライ寺院跡を調査し、五銖銭、開元通宝、彩色塑像、ブラーフミ文書、漢文文書などを発掘、スタインも一九〇八年、この地を発掘調査した。とくにスタインは、一九一三年十月二十五日から十一月月上旬にかけて詳細な考古学的調査を実施、吐蕃文書や多くの仏教関係の出土品を得ている。一九一三年から一九一四年にかけて、ドイツ探検隊のル・コックも、この寺院の発掘調査を実施し、絹織物、ブラーフミ文書、壁画、仏像、サンスクリットの經典の写本などを掘り出した。

ところで、タリム盆地の西北の辺境、クチャ（古代・亀茲国）からカシユガル（古代・疏勒国）の間に、十一世紀から突厥語で「巴尔楚克」（バルソク）と呼ばれる町があった。もともとは突厥の様磨という部族の中の一氏族であるパルソクの名を冠したものであるが、今日は人口三十万余の町となり、「巴楚」と表記されている。

この巴楚から東北約四〇キロのタクラマカンの流沙の中に、かつての西域36カ国の一つ、トムシュク（古代・尉頭国）がある。約九〇〇年間にわたり廃墟となっていたが、近年、河西回廊や蘭州からの漢族の移民によって開発され、現地の住民ウイグル族と併せて現在は約一万四千人が住んでいる。トムシュク市行政政府の説明によると、国家の西部大開発という目標のもと、この古代王国を鉱業と観光の目玉として開発し、近い将来二十万都市にする計画であるという。

二〇〇五年八月八日、私はトクズサライ寺院に到着、まず、中央部分の二区画になっている台地の、南側の仏塔を

調査したところ、高さ約五メートル、直径二メートル、円形のものが二基あった。さらに、ほぼ中央に東西対象に、高さ約一・五メートルの不規則な形をした仏塔が二基、その他、一メートルほどの仏塔が五基確認できた。

仏塔の台座は、一辺約三十メートルの正方形のヤルダン（風化土堆群）の上部に構築されている。北側の寺院区も、一辺約三十メートルの正方形の台地の上にあった。版築の仏塔は千年の歳月を経てほとんど朽ち果て、高さ三メートルほどの土塁が一つ、二メートルほどのものが五基、その他、五、六十センチメートルの仏塔らしき残骸が六基確認できるのみであった。寺院の正門は南面にあり、ゆるやかな坂道が五十メートルほど続いていた。入口のすぐ左手に貴顕の人を葬った木棺があったと考えられる、高さ一メートル、幅一・五メートル、奥行き四、五メートルほどの窟が二つあり、内部を調査したが何も発見できなかった。この仏教寺院の南と西と東には、今は水枯れになってしまっているが、トムシユク山を河源とする狭い河川の跡があった。寺院の南側は、今でも岩塩によって土壌が白く噴出していて、地下に伏流水があるので、地表は湿気を帯び雑草が群生していた。しかし唐王城や寺院区の郊外は、見渡すかぎり乾燥化によって塩害の様相を呈しており、農作物の育成は不可能であり、放牧も難しく住民は土地を離れざるを得なくなったと思われる。

唐王城と寺院区までの約九十メートルには、魏晋から唐代のものと思われる錦、綉、綾、綢、絹などの織物が地面に散乱しており、私はそれらをカメラに納めた。このように、貴重な絹製品や毛織物がトクズサライ仏教寺院の周辺に見られることは、尉頭国がシルクロードの要衝として、中継貿易で栄えていたことを暗示させるに十分であった。

西域南道は、前漢から魏にかけて、多くの旅人が往来する文化交流の中心道であった。しかし、タクラマカン砂漠の拡大化にともない、ヤルカンド川やホータン川の河床のルートが変更、また水枯れの様相を呈し、ダンダンウイリク、ニヤ、円沙故城、ミールンなど、歴史の町はしだいに流沙に埋もれていった。

それに対して西域北道は、天山山脈の南麓を走っているため、カシユガル川もクチャ川もさほどルートの移動はな

い。西域南道の砂漠化にともなう都市の衰退化とともに、西域北道は日毎に賑わいを見せ、六朝から唐代にかけて多くのソグド商人や官人や僧侶が往来し活気を呈していた。『新唐書』亀茲伝には、「于闐、碎葉、疏勒を統べしめ、四鎮と号す」とあるが、とくに、安西都護府が亀茲に移ってから、すなわち貞観二十二年以後は、ますますシルクロード交易は盛んになり郁頭州（尉頭国）は繁栄している。

一九二八年八月、中国人による初めてのトムシユク発掘調査が行われた。黄文弼らをはじめとする中国・スウェーデン西北科学調査団である。ペリオやスタインやル・コック等の発掘済みの地域であったにもかかわらず、ブラーフミ文書、仏頭、彩絵陶器、シルクの舍利袋、六体の泥塑仏像、亀茲語と漢語が刻印されている銅貨など、数多くの貴重な文物を掘り出している。

次いで一九五九年と一九八三年に、新疆文化庁と中国科学院考古研究所新疆支局との共同調査グループが、古城遺址群、摩尼教遺址、唐王城、トクズサライ寺院址、ならびに十余の支城と烽火台を発掘調査した。五銖銭の鋳型、絹織物、仏頭、トカラ語文書などの出土文物は、新疆ウイグル自治区博物館に約四千点、巴楚県文化館に約四百点収蔵されている。中でも私が注目したのは、そこから出土した五銖銭の鋳型である。尉頭国では早くも北朝時代から、自国で貨幣を鋳造し、貨幣経済が確立していた証左といえるからである。

宗主国である亀茲国では『大唐西域記』巻一、屈支国の条に「貨は金銭、銀銭、小銅銭を用う」とあるように、町には各種の貨幣が流通していた。この亀茲国の配下であり一つの経済圏であった尉頭国では、貨幣の原材料を手に入るため、天山山中に工トを派遣して銅鉱石を採掘させていたと思われる。イラン高原に盛行した青銅冶金術が、天山南麓のオアシスに東漸した恩恵によって、尉頭国でも鋳型を作って銅の貨幣を流通させたのである。

『魏書』食貨志に、「国を挙げて、臣民、銭を負い貨を懷にす」とあり、さらに、『隋書』食貨志には、「西域の金銀の銭を用う。而れども官禁ぜず」とあるが、中原の歴代王朝もその利用を認めていたことが分かる。

天山南麓にある龜茲国の北方一二〇キロメートルにある、アアイ石窟とアゲ（阿格）故城の間は、燃料となる木材の多いことから、漢代の精錬所跡が今も二カ所残存している。この天山南麓のオアシス国家である龜茲国や尉頭国に於いては、銅や錫の冶金技術が発達し、二千年前から鉄鉱産業が盛んであったことを確認することができた。そのことを証明するかのようには、『大唐西域記』巻一、屈支国の条にも「土は金、銅、鉄、鉛、錫を産す」と明記されている。私はトムシユクの北方の天山山麓からクチャまでの車窓から山肌を見たが、赤（酸化鉄）、黄（硫化鉄）、青（硫酸鉄）をはじめとして、優良な鉱石が各種産出しているようすを窺い知ることができた。

三、一二〇〇年前の少女のミイラの調査報告

二〇〇〇年八月、トムシユクのウイグル族の牧人は、タクラマカン砂漠の中へ、薪にするために胡楊や紅柳などを拾いに入った。すると、流沙の中から人間の足が出ていることに気が付き掘り起こしてみると、若い女性のミイラであった。学識の無い牧人にとって、そのミイラが最近のものなのか、古い時代のものなのか全く理解できない。一応、驢馬車に積んで自分の家に持ち帰り、小屋の中に寝かせておいた。時折、知り合いの牧人や農夫に、ミイラのことを話しているうちに、いつしか近隣の評判になり、やがてトムシユク行政政府の知るところとなった。トムシユク市歴史陳列館は、二〇〇五年十一月一日に開館するにあたり、展示物の目玉とするべくこのミイラを牧人から買い上げた。二〇〇五年八月八日、幸いにも歴史陳列館のオープンの前に、このミイラを詳細に調査することができた。ミイラは陳列館の二階の片隅、嚴重に南京錠の掛かった六畳ほどの部屋に大切に保管され、蓋の無い大型のガラスケースの中の、紫色の布の上に横たわっていた。私は一九七八年から今日まで、新疆各地の博物館や文物保護所や陳列館に展示されているミイラを、三十体以上見てきた。有名な楼蘭の美女も幾度となく見たが、尉頭国のミイラは、どの地域のミイラよりもよく保存されていた。

ミイラは身長一四五センチメートル、C14測定法によって年代測定をしたところ、約一二〇〇年前、中国の唐代に死亡、年齢は十六歳、民族はこの地方一帯に住んでいた塞族である少女は首からの多量の出血のため、体内の水分がまったく無くなり、腹部は内臓を抜いたように大きく陥没していた。胸の下あたりまでもある長い髪は、黒と茶の間色で、僅かにカールしている。歯は比較的小さく、上下がよく交合、眉毛も残っていた。鼻は細く長く少し高く、下顎骨は先端が細い。額は狭く、眉毛と目の間隔が極めて広い。胸骨の張りが異常に大きく、肩は丸みのあるなで肩でなく張っている。手の指は長く滑らかで、爪も細く形もよく整っており、上流社会の少女と思われる、力仕事をしていなかったことが分かる。砂漠から発見された時、美しい平織りの黄色のシルクにくるまっており、その布は現在、左足の膝の外側に置かれている。

少女は、首の左部分が五、六センチ切断されていた。左首の筋肉をかき切られたことにより、死後、硬直が起こるさいに、右首の筋肉の収縮が優先され、右肩の張りはきわめて大きい。なお、切り口の角度、深さ、幅などから見て、凶器はナイフではなく、草刈り鎌のようなものを首に当て、引き下ろすように切られたものと推察される。

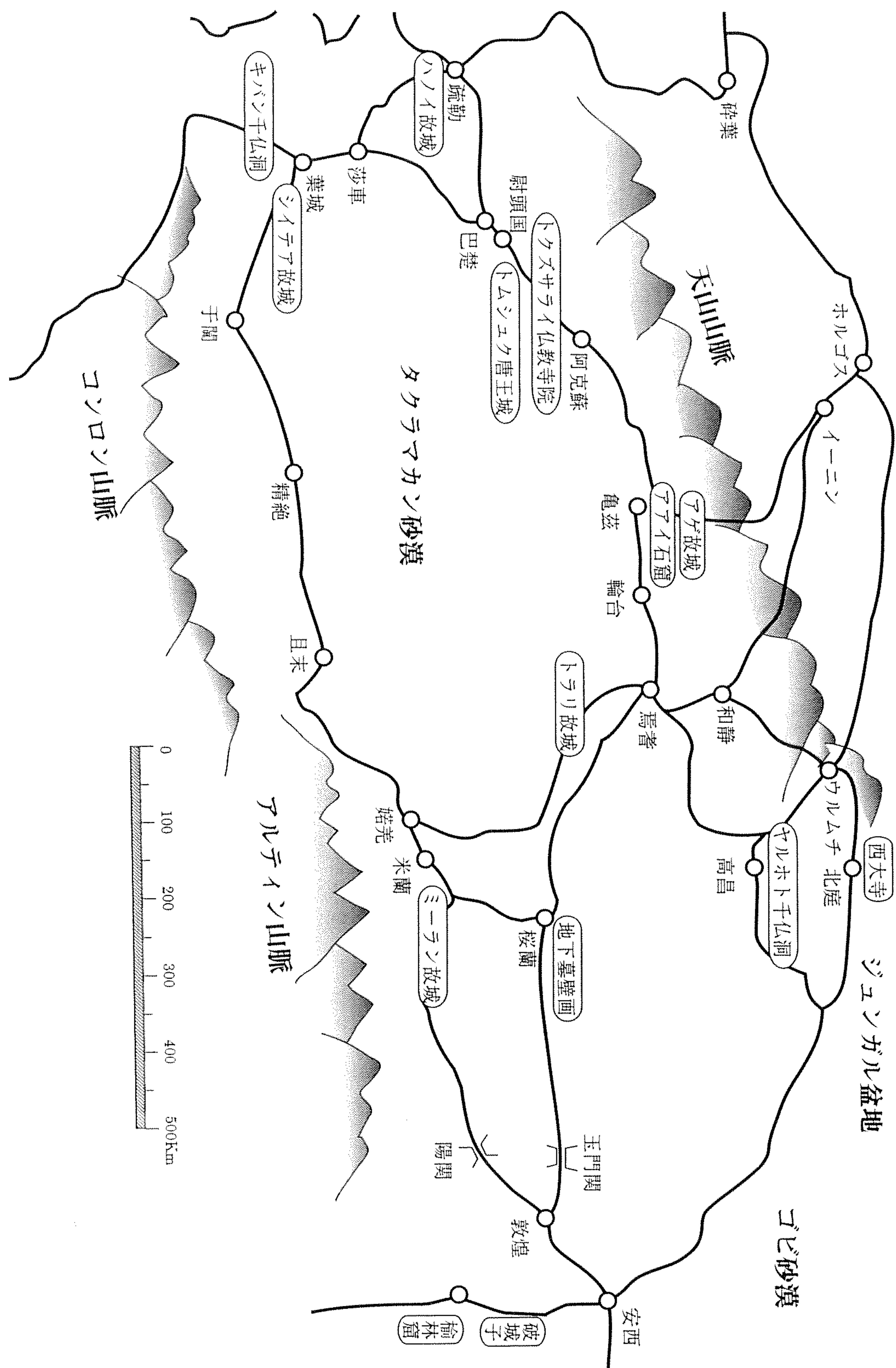
家族は殺された娘を洗い、絹の衣装を着せてタクラマカンの流沙の中に丁寧に埋葬した。しかし、一二〇〇年間もの長い歲月、天山山脈から吹き流れる風や竜巻によって、地下約一メートル半に眠っていた少女の死体は、地表に露出したのである。尉頭国の近辺は北東風が強く、元の地面と削り取られた底を調査したところ、地面は平均一・五メートル削り取られていた。

一二〇〇年の眠りから覚めた塞族の美少女、これだけよく原形をとどめているミイラは中国全土や中央アジアでも稀であり、今後、解剖学的な調査を待つ必要があり、整形外科による顔形の復元も期待されるところである。

注

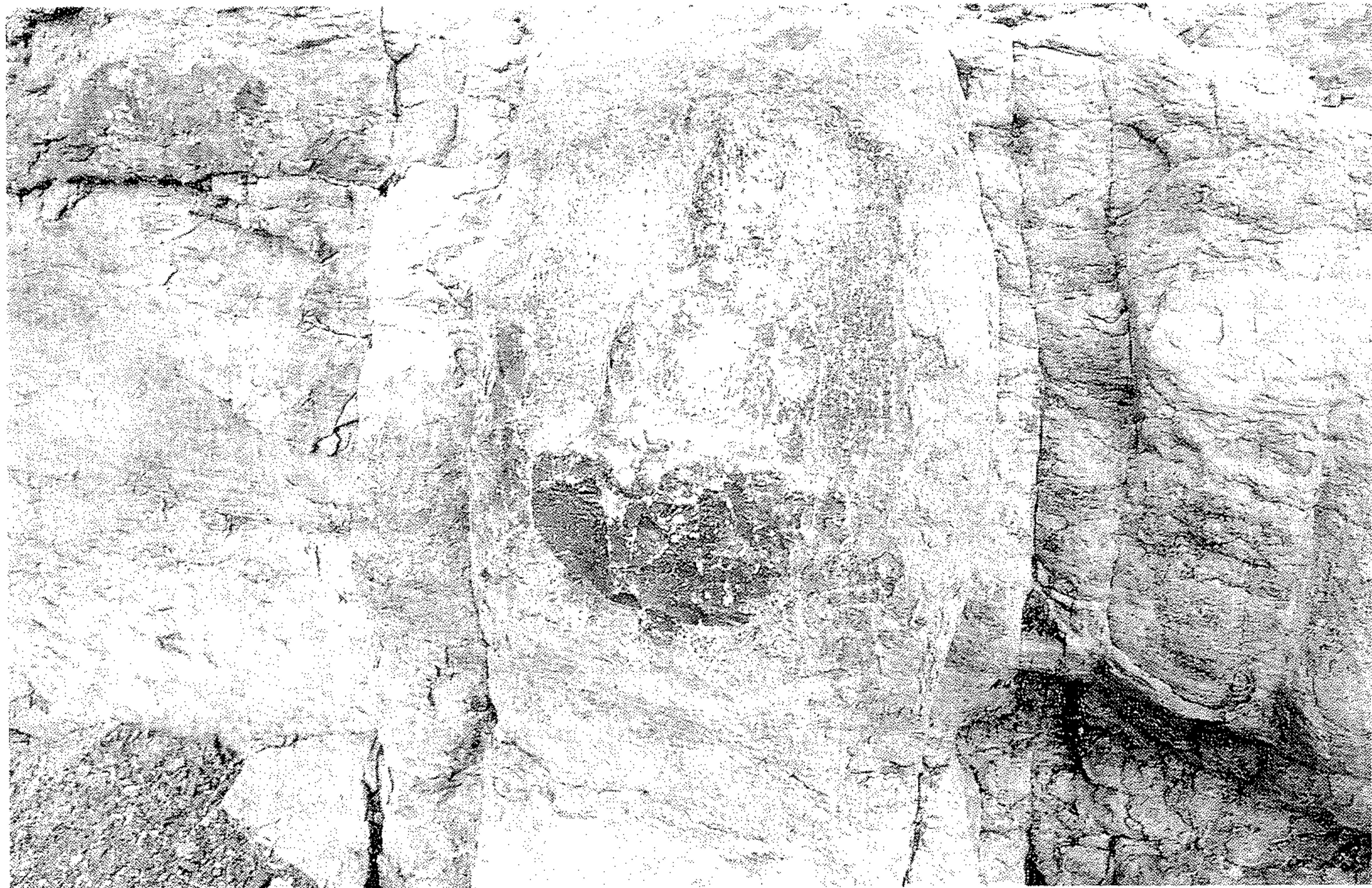
- (1) 大谷探検隊は、第一次の一九〇三年に渡辺哲信が、第二次の一九〇九年に野村榮三郎が、第三次の一九一一年に吉川小一郎と橋瑞超が巴楚の町を通過しているが、いずれもトムシユク、すなわち尉頭国には訪れていない。ここでは、一九一一年三月、第三次探検隊が巴楚を通った記録を、橋瑞超等の資料をまとめた『中亜探検』より引用して紹介する。
「この沿道にパイチョンとか、アクスウとか、あるいはマラルバシといった人口二、三万の都市があつて、歴史上、もしくは仏教東漸史の研究上きわめて重要なところもあるが、わたしはひたすらカシユガルへと急いだので、それらに滞在する余裕はなかった。そして、ただ力のかぎり、氣力をかたむけて昼も夜も馬に鞭うって急いだのであつた」とある。
- (2) 西域36カ国については、『前漢書』西域伝に「本、三十六国」、『後漢書』卷六六に「三十六国の心を堅めんと欲すれば」、『漢書』卷一二に「西域、本三十六国」、『資治通鑑』卷二六に「烏孫、康居等三十六国の動静を督察」、『魏略』に「時に三十六あり」、『後漢紀』卷一五に「時に三十六国に通ず」、『隋書』西域伝に「西域に三十六国有り」などの記述がある。
なお、この36カ国の範囲や意味について、伊瀬仙太郎著『中国西域経営史研究』嚴南堂、一九五五年刊、第一章第二節において、「三十六国といつてもこれは決して正確な国数を示したのではなく、単に多数とかたくさんとかの意味を表したにすぎず、その実数はこれ以下であつたろうと考えられる」と述べている。
- (3) 于闐国の滅亡年代については、主たるものとして九九二年説、一〇〇六年説、一〇〇九年説があるが、ペリオ文書二七三七に、敦煌から于闐に九九三年、使者が派遣された記録があるので、九九二年説は誤りである。于闐の滅亡年の研究は、拙稿「西域の古代都市の興亡に関する一考察」(『シルクロード研究』、一九九八年三月)に詳しい。
- (4) 地元の農夫や牧人は、唐王城の断崖全体が巨大な要塞となっていたので、據史徳城『新唐書』とも、握瑟徳城『旧唐書』とも呼んでいた。なお、唐王城の名称の由来は、トムシユク直轄地の中の、トウトクラク(唐托克拉克)という所に住む農民のアイリーシャク(艾里沙克)が、近郊の地中から後漢の五銖銭や陶器、また唐代の開元通宝や亀茲平銭を見つけたことによる。また、トムシユク(図本舒克)という名称は、一八二一年から一九一一年までこの地に清王朝が軍台を設け、トムシユク軍台と呼んでいたことに由来する。
- (5) スタイン『中央アジアの仏教古代後期』七巻は、トムシユクの仏教遺跡の調査記録を収録している。とくに、スタインのトムシユクでの滞在のようすについては、『スタイン、考古と探検』新疆美術摄影出版社、一九九二年刊、第四編第十二章に詳しい。

(やまだ かつひさ・委嘱研究員)





唐王城出土の4～5世紀の泥塑菩薩像（筆者撮影）



トムシュク山の断崖の西側に刻まれた石仏（筆者撮影）



唐王城の西側に分布するトクズサライ寺院遺址（筆者撮影）



トクズサライ寺院より唐王城を望む（筆者撮影）

キリスト教はその歴史において諸宗教との出会いを数多く経験している。キリスト教にとって他の諸宗教の存在は、決して新しいものではない。初代教会は、ヘレニズム、ローマ世界との遭遇において、中世の教会はイスラム文化との接触において、そして近代の教会は伝道地としての世界各地の諸宗教との出会いにおいて、それぞれに神学的対応を求められ、そのたびに自己認識や他者認識を変化させてきた。宗教の多元性という事実そのものは、キリスト教に限らず、およそ宗教の成立以来、歴史を通して変わらざる状況である。宗教の多元性について現代世界に特有な状況とは、この事実が主題化され、キリスト教信仰の本質側面に触れる神学の中心的な問いとなったということである。このような新しい局面をうみだす最も本質的な「コペルニクスの転回」の必要を提唱したのは神学者・宗教哲学者ジョン・ヒック (John Hick) の「宗教多元主義」の主張である。ヒック自身は、もともと伝統的な福音主義者であったが、文化的・宗教的な多様性が現に存在しているという事実を、キリスト教の説く神の愛と一致させる問題を考えることを通じて、次第に多元論へと向かっていったという。⁽¹⁾ なかでも、一九八二年に出版した著書『神は多くの名前を

1 はじめに

明治キリスト教と宗教多元主義の諸問題
―事例としてのユニテリアン派の活動から― (1)

氏 家 法 雄

Research on the Ancient Buddhist Kingdom of Tumushuke

Katsuhisa Yamada

Tumushuke (in China's Xinjiang Uygur Autonomous Region) was an important oasis kingdom on the ancient Silk Road trading routes through Central Asia. In the Chinese history, the Book of Han, the section on the tales of the western regions describes the Tumushuke as it was some 2,000 years ago. It is portrayed as one of the 36 states of the western regions, and details such as its population, the number of households and soldiers are given.

The first section of this paper summarizes the descriptions of Tumushuke's history that appear in classical Chinese historical records and describes texts and artifacts that have been excavated at the site of the capital city Tang. The rise and decline of the kingdom is described and the inference is forwarded that it was finally destroyed by Islamic forces at the start of the 11th century.

The second section describes the author's two research missions to the Turkuksalai temple at the site of Tumushuke, the first such mission to be undertaken by a Japanese researcher. The factors in the decline of this and other Buddhist kingdoms is considered and the theory advanced that this was due to two factors: 1) internal corruption and 2) the absence of secular leadership capable of uniting the Buddhist kingdoms of the Silk Road in order to mount an effective resistance to the Islamic forces.

The third section describes a 1,200-year old mummy of a girl, 16 years old at the time of her death. The process by which this mummy was discovered and the cause of the girl's death are analyzed.

This is a pioneering paper as no prior research on Tumushuke exists (in Japanese).